

二つの語用論的分業 —語彙的使役・生産的使役と能動・受動—

ルディ トート
Rudy TOET

【要旨】 先行研究では、形式的に無標である語彙的使役が意味的にも無標で、形式的に有標である生産的使役が意味的にも有標であることが「語用論的分業」として捉えられることがある。更に、発話過程においては解釈過程も参照され、解釈過程においては発話過程も参照される双方向的な形式的モデルも提唱されている。主語の指示対象が何らかの属性を有することを含意する「属性叙述受動文」と、主語の指示対象と何らかの関連を有する「潜在的受影者」が文の表す事象から影響を受けることを含意する「潜在的受影者受動文」も、対応する能動文に比して有標な形式であるだけでなく、対応する能動文には必ずしも伴わない含意を持つことにより意味的にも有標であると言える。本稿では、これらの現象がどこまで類似するかを吟味しながら、語用論的分業の概念を部分的に属性叙述受動文と潜在的受影者受動文に適用し、二受動文の双方向的な最適性理論的モデルを提示する*。

【キーワード】 使役 受動文 有標性 推意 双方向的最適性理論

1 はじめに

日本語には生産的標識-(s)ase-を含む「生産的使役」とそれを含まない「語彙的使役」がある。例えば、「着させる」は-(s)ase-の付着により「着る」から派生される生産的使役動詞であるが、「着せる」は使役標識-se-が生産的でないため、「着る」との通時的派生関係はあるものの、共時的には語彙的使役動詞である。そして、他言語でも観察されるように、ある非使役形に対して語彙的使役動詞と生産的使役動詞が両方存在する場合は、語彙的使役は典型的な使役的場面、生産的使役は非典型的な使役的場面を表すのに用いられる¹。語彙的使役と生産的使役のこの意味的相違は、真理条件の違い

* 本稿の執筆及び修正にあたって、口頭発表を行った日本語文法学会第20回大会(2019年12月7日、学習院大学)の会場にいらした方々及び『京都大学言語学研究』の査読者の方々から数多くの有益なコメントを頂いた。この場を借りて深謝の意を表す。

¹ 本稿では、「使役」を英語の *causative* や *causation* に当たる日本語として用いる。許可や指示を通じて間接的に人が動作を行うことを引き起こす場面も、直接の物理的接触をもって人や物の状態変化を引き起こす場面も「使役的場面」と称する。「使役」という用語は前者のような場面に限定した用法もあるが、本稿で一貫してこの用語を用いることでその場面が典型

ではなく推意(implicature)によるもの、つまり「語用論的分業」(division of pragmatic labor)として捉えられることがある。

日本語における受動文に関しては、対応する能動文の主語に当たる名詞句が「に」で標示される「ニ受動文」が非情物主語と有情物非主語を持つと不適格になる場合が多いが、適格なものとしては主語の指示対象が何らかの属性を有することを含意する「属性叙述受動文」や主語の指示対象と何らかの関連を有する潜在的有情物が文の表す事象から影響を受けることを含意する「潜在的受影者受動文」がある。これらの含意も推意と見なせば、これらの受動文と対応する能動文の間にも語用論的分業があると考えることができる。

本稿の主な目的は、これらの現象がどこまで類似するかを吟味することにある。第2節では使役の語用論的分業に関する先行研究を統括する。簡潔に意味的相違(2.1)を見てから、語用論的分業の概念(2.2)とその分析(2.3)について考察する。その次は、発話過程においては解釈過程も参照され、解釈過程においては発話過程も参照される双方向的な形式的モデル(2.4)を紹介する。第3節では受動文、取り分け非情物主語と有情物非主語を持つ受動文を取り上げる。対応する能動文の主語に当たる名詞句が「によって」で標示される「ニヨッテ受動文」にも触れながら、ニ受動文と対応する能動文の間の選択が各参加者の有情性(3.1)と主題性(3.2)にどのように影響されるかを考察してから、その最適性理論的モデル(3.3)を提示する。最後には、語用論的分業の概念(3.4)を適用し、双方向的な解釈過程のモデル(3.5)を提示する。

2 語彙的使役と生産的使役の語用論的分業

2.1 語彙的使役と生産的使役の意味的相違

柴谷(Shibatani 1976a: 257, 259–69, 283–8; 1976b: 27–38)によると、ある非使役形に対して語彙的使役動詞と生産的使役動詞が両方存在する場合は、これらが完全に同義ではなく、「意味的機能の分割」(division of semantic function)が観察される²。この現象が見られる他の言語として、英語と朝鮮語にも言及している。具体的には、語彙的使役は「操作的使役」(manipulative causation)、生産的使役は「指図的使役」(directive causation)を表すことが多いとしている³。例えば、以下の(1)は母親が手で太郎の身体に服を着け

的な使役的場面であることを示唆する意図はない。むしろ、2.2 では後者のような場面が典型的であるという立場を採る。

² 早いものとしては McCawley (1972: 147–8, 1973) と柴谷(Shibatani 1973: 330 注 5, 345–68)がこの現象に言及している。

³ 使役表現の意味に関しては「直接使役」(direct causation)と「間接使役」(indirect causation)という用語が用いられることが多いが、柴谷の「操作的使役」と「指図的使役」はそれぞれ直接使役と間接使役の具体例と見なすことができる。

た場合に用いるもので、母親が許可や指示をして太郎が自分で服を着た場合は語彙的使役動詞「着せる」を生産的使役動詞「着させる」に置き換えなければならない。

(1) 母親は太郎に服を着せた。 (Shibatani 1976a: 263)

柴谷は同じような意味的相違を示す対の例として「落とす・落ちさせる」「沈める・沈ませる」「倒す・倒れさせる」「寝かす・寝させる」を挙げている。

柴谷によると、語彙的使役が操作的使役ではなく「常套的目的」(conventionalized purpose)の伴う使役的場面を表すこともある。例えば、語彙的使役動詞である「入れる」は操作的使役を表すことが多いが、以下の(2)a.は話し手が映画館などの施設の中へ入る許可を得ようとするような場面でも用いられる。しかし、その場合は映画館の中への移動自体よりも、通常その目的である映画の鑑賞の方に関心があるという意味合いになる。このような常套的目的を示唆する意図がなければ、生産的使役動詞の「入らせる」が用いられている(2)b.の方が自然である。

(2) a. 入れてください。 (Shibatani 1976a: 263)
b. 入らせてください。 (同上)

柴谷は同じように用いられる語彙的使役の例として「(道を聞く目的で通行人を)止める」や「(寝させる目的で子供を2階に)上げる」を挙げている。

ある非使役形に対して語彙的使役動詞がなく、生産的使役動詞しか存在しない場合は、生産的使役が両方の機能を担わざるを得ない。例えば、McCawley (1978)によると、「履く」に対応する語彙的使役動詞がないため、生産的使役動詞の「履かせる」は指図的使役だけでなく操作的使役を表すこともできる。従って、以下の(3)は太郎が許可や指示をして次郎が自分でズボンを履いたという指図的使役の場面でも、太郎が手で次郎の脚にズボンを着けたという操作的使役の場面でも用いられる。

(3) 太郎は次郎にズボンを履かせた。 (McCawley 1978: 251)

McCawley は同様なものとして「(手袋を)嵌めさせる」を挙げている。また、柴谷によると、「立てる」は非情物の目的語しか取らないため、被使役者が有情物の場合は操作的使役でも指図的使役でも「立たせる」が用いられる。

2.2 語用論的分業の概念

生産的使役の派生を文のレベルにおける統語的過程と見なす McCawley (1978)によると、共時的に非使役形から派生されない語彙的使役に比べて生産的使役が統語的に有標である。仮に語のレベルにおける語彙的過程と見なしても、生産的派生には「心的労力」(mental effort)が伴うはずであるため、生産的使役の方が形式的に有標であるとするのは適当であろう。そして、McCawley は、あらゆる使役的場面のうち、直接の物理的接触と即時的結果が伴うのが典型的なもの、すなわち、幼児が最初に認識し、他の因果関係の概念化の基盤となるものであるという George Lakoff の観察に言及し⁴、その典型性ゆえに、そのような使役的場面を表す使役形がそうでない使役形に比べて意味的に無標であると主張する。柴谷が「操作的使役」と称するものがこれに当たる。しかし、柴谷が「指図的使役」と呼ぶものに関して、常套的目的を示唆しないものに比べて、常套的目的の伴う使役的場面を表すものが、その目的の常套性ゆえに、典型的な使役的場面を表すもの、つまり意味的に無標なものであると見なすべきであろう。結果として、ある非使役形に対して語彙的使役と生産的使役が両方存在する場合は、無標な意味を表すのには無標な形式である語彙的使役が用いられ、有標な意味を表すのには有標な形式である生産的使役が用いられるということになる。なお、本稿では Givón (1991: 337)の論考を参考に有標性の概念を広く解釈し、形式的有標性に関しても意味的有標性に関しても「談話における頻度が高く認知的に単純なもの」を「無標」、 「談話における頻度が低く認知的に複雑なもの」を「有標」として扱う⁵。

McCawley によると、語彙的使役動詞が存在しなければ生産的使役が(3)のように多義になることは、両方が存在する場合の意味的相違が真理条件の違いではなく推意によるものであることを示す。Horn (1984)はこの仮説を受け、柴谷の「意味的機能の分割」(division of semantic function)に類似する用語の「語用論的分業」(division of pragmatic labor)を導入する。すなわち、同一の真理条件の無標な形式と有標な形式が存在する場合は、推意として、無標な形式は無標な意味、有標な形式は有標な意味を表すのに用いられるという分業である。

⁴ McCawley は Lakoff の考察を私信として紹介しているが、2年後の Lakoff & Johnson (1980a: 478–81, 1980b: 69–72)の考察の一部に当たる。

⁵ ただし、ここでいう「頻度」と「認知的複雑性」は相関するのみであって、必ずしも認知的に単純なものの方が高頻度で用いられるとは限らないことに留意されたい。

2.3 語用論的分業の分析

Horn は使役に限らず、同一の真理条件の無標な形式と有標な形式がそれぞれ持つ推意の発生を詳細に分析している。また、Levinson (1987: 408–10; 2000: 35–9, 73–164) も Horn の提案の要点を受け入れるが、分析は部分的に異なる。

まずは無標な形式が持つ推意の発生の流れを見る。語彙的使役が持つ、使役的場面が典型的なものであるという推意はその一種である。Horn は労力の過剰、すなわち伝達情報の過剰と形式の有標性の両方を制約する「R 原理」(R-principle), Levinson は伝達情報の過剰のみ制約する「I 原理」(I-principle)を用いるが、推意の発生の流れの分析は同じく以下の(i)の通りである⁶。

(i) a. 無標な意味の場合の発話過程

意味の無標性（例えば使役的場面の典型性）ゆえに、その意味を意図していることが聞き手に推論できると想定する話し手は、R 原理または I 原理に従って、無標な意味を意図していることを明示せず、無標な形式（例えば語彙的使役）を用いる。

b. 無標な形式の解釈過程

話し手が R 原理または I 原理を守っていると想定する聞き手は、無標な意味の無標性ゆえに、その意味が意図されていると推論する（「R 推意」(R-based implicature)あるいは「I 推意」(I-based implicature)）。

次は有標な形式が持つ推意の発生の流れを見る。対応する語彙的使役のある生産的使役が持つ、使役的場面が非典型的なものであるという推意はその一種である。Horn は伝達情報の不足を制約する「Q 原理」(Q-principle)を用い、以下の(ii)のような流れを描く⁷。

(ii) a. 有標な意味の場合の発話過程—Horn の立場

無標な形式を用いれば(i)b.により無標な意味を意図しているという R 推意が生じると想定する話し手は、やむなく有標な形式（例えば生産的使役）を用いる。

⁶ R 原理の「R」は Grice (1975: 45–6 = 1989: 26–7 = 1991: 307–8)の「関連性の公理」(maxim of Relation)に由来するもので、過剰な情報が通常、関連性を有しないということによる名付けである。I 原理の「I」は「情報性」(informativity; Atlas & Levinson 1981)を意味する。

⁷ Q 原理の「Q」は Grice の「第 1 の量の公理」(first maxim of Quantity)に由来するもので、伝達される情報の量が十分でなければならないことを意味する。

b. 有標な形式の解釈過程—Horn の立場

(i)b.により, 無標な意味は R 原理に反せず無標な形式を用いて R 推意として伝達できるため, 無標な意味を意図しながらそれが伝達されない有標な形式を用いることは Q 原理に反する。従って, 話し手が Q 原理を守っていると想定する聞き手は, 無標な意味が意図されていない—つまり, 有標な意味(例えば非典型的な使役的場面)が意図されているか, 話し手がどちらか一方の意味に限定するための十分な情報を備えていないか—と推論する(「Q 推意」(Q-based implicature))。

しかし, (ii)b.は必要以上に複雑であると思われる。ここで, 以下の(iii)のように単純化することを提案したい。

(iii) 有標な形式の解釈過程—著者による Horn の立場の単純化

(i)a.により, 無標な意味を意図して有標な形式を用いることは R 原理に反する。従って, 話し手が R 原理を守っていると想定する聞き手は, 有標な意味が意図されていると推論する (R 推意)。

Levinson は, 単に「真理条件が同一である無標な形式と有標な形式があり, 無標な形式が無標な意味を表すのに用いられる場合は, 有標な形式は有標な意味を表すのに用いられる」という「M 原理」(M-principle)を導入し, 以下の(iv)のような立場を採る⁸。

(iv) a. 有標な意味の場合の発話過程—Levinson の立場

無標な形式は(i)a.により無標な意味を表すのに用いられるため, 話し手は, M 原理に従って, 有標な形式を用いる。

b. 有標な形式の解釈過程—Levinson の立場

無標な形式は(i)a.により無標な意味を表すのに用いられるため, 話し手が M 原理を守っていると想定する聞き手は, 有標な意味が意図されていると推論する(「M 推意」(M-based implicature))。

2.4 語用論的分業の双方向的モデル

Blutner (1998: 137–9, 2000: 201–6)は Horn や Levinson の分析を受けて, 発話過程においては解釈過程が参照され, 解釈過程においては発話過程が参照される双方向的な形

⁸ M 原理の「M」は Grice の「様態の公理」(maxim of Manner)に由来するもので, 発話の様態, すなわち形式の有標性を, 意味の有標性に合わせなければならないことを意味する。

式的モデルを提示している。その双方向性は以下の(v)のように定義できる(Jäger & Blutner 2000: 129, Jäger 2002: 430–7, Blutner & Zeevat 2004: 13–8)。「超最適」(super-optimal)は最適性理論(Optimality Theory)における最適性の概念に関連した用語である。簡潔に言えば、発話過程は所与の意味 m と超最適なペアを成す形式 f を選択する過程で、解釈過程は所与の形式 f と超最適なペアを成す意味 m を選択する過程として捉えられるのである。「 $x < y$ 」は「 x よりも y が有標である」と読む。因みに、(v)a. は Blutner が R 原理及び I 原理に基づいて考案し、(v)b. は Q 原理に基づいて考案したものであるが、(v)a. と (v)b. の働きがこれらの原理の(i)–(iv)における役割と完全に一致するわけではないことに留意されたい。

(v) 双方向性⁹

形式と意味のペア (f, m) は、以下の a. と b. が両方とも真である場合かつその場合に限り超最適である。

- a. 「 $(f', m) < (f, m)$ 」が真である超最適なペア (f', m) が存在しない。
- b. 「 $(f, m') < (f, m)$ 」が真である超最適なペア (f, m') が存在しない。

まずは無標な意味 m_1 の場合の発話過程を考える。つまり、無標な形式 f_1 と有標な形式 f_2 のうち、 m_1 と超最適なペアを成すものの選択である。 f_2 が f_1 に比べて有標な形式であるため、形式と意味のペア (f_2, m_1) も (f_1, m_1) に比べて有標なペアであるとする。換言するならば、二つの形式の間には「 $f_1 < f_2$ 」という関係が成り立つため、「 $(f_1, m_1) < (f_2, m_1)$ 」は真、「 $(f_2, m_1) < (f_1, m_1)$ 」は偽である。つまり、 (f_2, m_1) は超最適性の条件の一つである(v)a. を満たさず超最適ではないが、 (f_1, m_1) は(v)a. を満たす。続いて、 (f_1, m_1) が(v)b. を満たすかどうか確認する。これは要するに、発話過程の中で解釈過程を参照し、無標な形式 f_1 を用いれば有標な意味 m_2 で誤解されないかの確認である。二つの意味の間には「 $m_1 < m_2$ 」という関係が成り立つため、「 $(f_1, m_1) < (f_1, m_2)$ 」は真、「 $(f_1, m_2) < (f_1, m_1)$ 」は偽である。つまり、 (f_1, m_2) は(v)b. を満たさず超最適ではないが、 (f_1, m_1) は(v)b. を満たす。従って、 (f_1, m_1) は両方の条件を満たし、超最適である。すなわち、 m_1 を表すには f_1 が用いられるのである。話し手が無標な形式 f_1 を用いた場合を出発点として、 f_1 と超最適なペアを成す意味を選択する解釈過程を辿っても、同じく (f_1, m_1) が超最適であるという結果になり、 f_1 が正しく無標な意味 m_1 で解釈されることが分かる。

⁹ Blutner は同じ論文で提示している別の双方向性概念と対照するために「弱双方向性」(weak bidirectionality)と称する。

次は有標な意味 m_2 の場合の発話過程を考える。つまり、無標な形式 f_1 と有標な形式 f_2 のうち、 m_2 と超最適なペアを成すものの選択である。「 $(f_1, m_2) < (f_2, m_2)$ 」が真であるため、一見 (f_2, m_2) が (v)a. を満たさないように見えるが、それは (f_1, m_2) が超最適であるかどうかにもよる。上で見たように「 $(f_1, m_1) < (f_1, m_2)$ 」が真で、 (f_1, m_1) は超最適であるため、 (f_1, m_2) は (v)b. を満たさず超最適ではない。従って、 (f_2, m_2) はやはり (v)a. を満たすのである。これは要するに、無標な形式 f_1 を用いれば無標な意味 m_1 で解釈されてしまうので、有標な意味 m_2 を表すのには用いられないということの意味する。続いて、 (f_2, m_2) が (v)b. をも満たすかどうか確認する。「 $(f_2, m_1) < (f_2, m_2)$ 」は真であるが、上で見たように「 $(f_1, m_1) < (f_2, m_1)$ 」も真で (f_1, m_1) は超最適であるため、 (f_2, m_1) は (v)a. を満たさず超最適ではない。従って、 (f_2, m_2) は (v)b. をも満たし、超最適である。無標な意味 m_1 の場合は無標な形式 f_1 が用いられるということが話し手にも聞き手にも分かるので、有標な意味 m_2 を聞き手に伝えたい話し手は、 m_1 と誤解されることを恐れずに f_2 を用いるわけである¹⁰。

3 属性叙述・潜在的受影者受動文と対応する能動文の語用論的分業

3.1 ニ受動文と対応する能動文の間の選択と有情性

以下の(4), (5)のように、非情物主語のニ受動文が不適格で、対応する能動文やニヨッテ受動文が適格である場合が多いことは古くから知られている¹¹。しかし、工藤(1990: 74–6)や金水(1991: 9–11)によると、(6), (7)のように非主語の指示対象も非情物である場合は、非情物主語のニ受動文でも適格文となる^{12, 13}。更に、金水(1992: 17)によると、(8)a.のような非情物主語と有情物非主語の能動文も不自然である。ニヨッテ受動文については 3.3 で触れるが、以上のことより、ニ受動文と対応する能動文の間の

¹⁰ $\{f_1, f_2, f_3\}$ 及び $\{m_1, m_2, m_3\}$ のように形式と意味の選択肢がそれぞれ三つあり、「 $f_1 < f_2 < f_3$ 」及び「 $m_1 < m_2 < m_3$ 」という関係が成り立つ場合は、定義(v)により (f_1, m_1) , (f_2, m_2) , (f_3, m_3) の三つのペアが超最適となるため、最も無標な形式 f_1 が最も無標な意味 m_1 、ある程度有標な形式 f_2 がある程度有標な意味 m_2 、そして最も有標な形式 f_3 が最も有標な意味 m_3 で用いられることが予測されるが、日本語にその実例が存在するかどうかの考察は今後の課題としたい。

¹¹ ニ受動文に関しては Lange (1890: 123, 233) や山田(1908: 374), 三矢(1908: 143–4), そしてニヨッテ受動文に関しては松下(1930: 160–1)が早く指摘している。なお、本稿と異なる理論的枠組みを用いているが、ニ受動文と対応する能動文の間の選択と有情性の関係の詳細についてはトート 2011 を参照されたい。

¹² 金水の挙げる例文は以下の 3.2 で紹介する潜在的受影者受動文または擬人化された主語を持つ受動文とも解釈できるものであるため、高見(1995: 107)が小泉他より引用している(7)を挙げることにした。

¹³ 目的語や受動文の二名詞句をまとめて「非主語」と呼ぶことにし、対象や受動者、被使役者など、文に現れている項のうち比較的動作主的でないものをまとめて「非動作主」と呼ぶことにする。

選択が各参与者の有情性と相関することは明らかである¹⁴。特に 2 項のうち一方が有情物で他方が非情物の場合は有情物名詞句を主語に、非情物名詞句を非主語にする傾向が強いようである。この場合は有情物の方が動作主であれば能動文が、非動作主であれば受動文が成立する。

- (4) a. 議長が開会を宣言した。 (井上 1976a: 76)
 b. *開会が議長に宣言された。 (Kuroda 1979b: 309 = 1992: 187)
 c. 開会が議長によって宣言された。 (井上 1976a: 76, 83)
- (5) a. 王が白いボールを高々と打ち上げた。
 b. *白いボールが王に高々と打ち上げられた。 (Kuroda 1979b: 309 = 1992: 187)
 c. 白いボールが王によって高々と打ち上げられた。 (同上)
- (6) 時々低いベトン・トーチカがヘッドライトに照らし出された。
 (工藤 1990: 75; 大岡昇平の小説『俘虜記』より)
- (7) 甲板が波に洗われている。 (小泉他 1989: 26)
- (8) a. ??彼女の美しさが私を驚かせた。 (金水 1992: 17)
 b. 私は彼女の美しさに驚かされた (または「驚いた」)。 (同上)

3.2 二受動文と対応する能動文の間の選択と主題性

非情物主語と有情物非主語を持つ二受動文が適格である場合もある。その主な種類としては、以下の(9)b., (10)b.のように主語の指示対象が何らかの属性を有することを含意する「属性叙述受動文」(益岡 1982: 56–9 = 1987: 188–91, 2000: 56–8)と、(11), (12)のように主語の指示対象と何らかの関連を有する潜在的有情物が文の表す事象から影響を受けることを含意する「潜在的受影者受動文」(益岡 1991a: 197 = 1991b: 111, 2000: 63)が挙げられる¹⁵。(9)については、一人の個人が雑誌をよく読んでいることからその雑誌の属性を推論することは難しいが、多くの若者が読んでいることからはその雑誌の人気や内容についての含意が読み取れる。(10)については、チョムスキーが小説を数回読んだということからはその小説の属性が読み取りにくい、著名な学者である

¹⁴ 間接受動文や動作主が明示されていない受動文に代表される、対応する能動文の存在が明らかでない受動文は考察の対象外とする。

¹⁵ 属性叙述受動文については、久野(Kuno 1990: 54–6)と高見(1995: 99–100)もそれぞれ独立して類似する一般化を提示している。潜在的受影者受動文については、三矢(1998: 144–5)や井上(1976a: 84–5), Klaiman(1982: 406), 井島(1988: 83–9), 神尾(Kamio 1989: 103–8)が益岡の一般化を部分的に先立つ指摘を行い、高見(1995: 94–8)も類似するものを提示している。どのような文が潜在的受影者受動文として解釈されやすいか、そしてどのような潜在的受影者があるかについては、天野(2001, 2002: 19–41)と武田(2014)の考察が参考になる。なお、属性叙述受動文と潜在的受影者受動文もトート 2011 で詳細に扱っている。

ため、論文を数回引用したということからはその論文が重要または優秀なものであると推論できる。従って、(9)b, (10)b.のみ属性叙述受動文としての解釈が容易で、適格文と判断される。(11), (12)からは、文に現れていない絵と金の所有者などが被害を被ったと読み取れる。本稿では、属性叙述受動文や潜在的受影者受動文のこのような含意を推意と見なす。

- (9) a. *この雑誌は、太郎によく読まれている。 (益岡 1982: 57 = 1987: 189)
 b. この雑誌は、10代の若者によく読まれている。 (同上)
- (10) a. *この小説は、チョムスキーに数回読まれた。 (益岡 1982: 58 = 1987: 190)
 b. この論文は、チョムスキーに数回引用された。 (同上)
- (11) あの絵が子供に引き裂かれた。 (益岡 1991a: 197 = 1991b: 111)
- (12) 大切なお金が泥棒に盗まれた。 (同上)

久野(1986: 79–81)の考察を参考に、有情性と同様、各参与者の主題性の高低も二受動文と対応する能動文の間の選択に影響すると考えたい。本稿では、参与者の主題性を「話し手がその参与者に関連する情報の伝達を意図する程度」と定義する¹⁶。また、2項の間の主題性の差が大きい場合は主題性の高い方の名詞句を主語に、低い方の名詞句を非主語にする傾向があり、主題性の高い方が動作主であれば能動文が、非動作主であれば二受動文が成立するとする。更に、話し手が非動作主の属性についての推意や非動作主と何らかの関連を有する潜在的有情物の受ける影響についての推意の伝達を意図すれば、その推意の内容により非動作主の相対的主題性が高くなるとする。そうすると、非動作主が非情物で動作主が有情物であっても、非動作主の相対的主題性が十分高ければ、主題性による態の選択への影響が有情性のそれを上回り、属性叙述受動文や潜在的受影者受動文が成立すると考えることができる¹⁷。

3.3 二受動文と対応する能動文の間の選択の最適性理論的モデル

ここでは、2.4でも言及した最適性理論の考え方を採用し、二受動文と対応する能動文の間の選択を有標性の問題として捉える。具体的には、「最適性理論的統語論」

¹⁶ 柴谷(Shibatani 2006: 247)の「談話関連性」(discourse relevance)の定義に一部類似する。

¹⁷ 天野(2001, 2002: 19–41)は属性叙述受動文と分類されてきたものも実は潜在的受影者が関わっていると主張するが、反例となる文も挙げている(天野 2002: 195–6)。和栗(2005: 163–5; 堀川他 2003: 35–6も参照)も反例を挙げ、属性叙述受動文の存在を認めるべきであると反論する。本稿の考え方が正しければ、それぞれの推意の内容が異質であるにしても、属性叙述受動文と潜在的受影者受動文の適格性が推意に伴う非動作主の高い主題性に起因するという点では同質であるということになる。

(Optimality-Theoretic syntax)の一例である Aissen (1999 = 2001)の態の汎言語的分析を日本語に適用することになる¹⁸。Aissen に倣って、「有情物 < 非情物」「高主題性 < 低主題性」「動作主 < 非動作主」「主語 < 非主語」の「有標性階層」(markedness hierarchies)があり、「<」の左側にあるものよりも右側にあるものが有標であるとする^{19, 20}。そして、いわゆる「有標性逆転」(markedness reversal)の一種として、無標な範疇が無標な範疇と組み合わせられ、有標な範疇が有標な範疇と組み合わせられるのが無標な状況であって、無標な範疇が有標な範疇と組み合わせられるのは有標な状況であるとする。最適性理論ではこれを「調和的整列」(harmonic alignment)という階層派生手順によってモデル化する(Prince & Smolensky 1993/2002: 147–51)。詳細については割愛するが、Aissen はこの手順により「有情物 < 非情物」「高主題性 < 低主題性」「動作主 < 非動作主」のような階層をそれぞれ「主語 < 非主語」の階層と組み合わせることで以下の(vi)のような「有標性制約」(markedness constraints)を得る²¹。いずれも、「主語 < 非主語」の左側にある範疇「主語」を他の階層の右側にある範疇と、あるいは右側にある範疇「非主語」を他の階層

¹⁸ ここで提示する発話過程の最適性理論的モデルはトート 2013 で紹介したものを一部修正し単純化したものである。態の選択を左右する要因は有情性や主題性以外にも人称や指示性(久野 1978, Shibatani 2006)などがあり、すべての要因の釣り合いを正確に捉えるのには、順位の高い制約と低い制約の間に厳格な支配関係があるとされる標準最適性理論は恐らく不十分である。トート 2013 では制約の順位が評価ごとに無作為に変動する「推計的最適性理論」(Stochastic Optimality Theory)という枠組みを採用したが、最も正確なモデルが構築できるのは、最適性理論の前身で、厳格支配の代わりに制約それぞれに実数の加重値が付与される調和文法(Harmonic Grammar; Legendre, Miyata & Smolensky 1990ab, 1992)であると思われる。日本語に比べて英語で非情物主語の文が成立することが多いなどの言語間の違いは、各制約の加重値、つまり各制約の「重み付け」の違いをもって捉えることができる。著者は現在、調和文法を用いたモデルを扱う別稿を準備している。

¹⁹ 久野(1978, 1986)が態の選択の分析に用いる「共感度階層」(empathy hierarchies)や柴谷(Shibatani 2006)が用いる「関連性階層」(relevance hierarchy)に類似するが、理論的意味合いは異なる。それぞれの名称から分かるように、久野の階層はどのような名詞句の指示対象が共感しやすいか、つまり、どのような名詞句の指示対象の視点が取りやすいかの階層で、柴谷の階層はどのような名詞句の指示対象の「談話(における)関連性」(discourse relevance)が高いかの階層であり、どちらも有標性の概念を中心とした階層ではない。詳細についてはトート 2011 を参照されたい。

²⁰ 本稿では便宜のため2項階層を用いるが、厳密には「非動作主」を「対象」と「受け手」の二つに、そして「非主語」を「直接目的語」「間接目的語」「受動文の二名詞句」の三つに分けるべきであろう。更に、工藤(1990: 74–6)と久野(1986: 81–2)によると、非主語が非情物である場合に加え、動物など、有情性の比較的低いものである場合も非情物主語の二受動文の適格性が増すのであるが、このことを正確に捉えるのには「有情物」と「非情物」の間に「非人間有情物」を挟むべきかもしれない。

²¹ Aissen (1999: 687–9 = 2001: 72–4)は、初の最適性理論的統語論の試みである Legendre, Raymond & Smolensky (1993: 465–7 = 2006: 166–9)の格及び態の類型論的分析を参考に、「主題性」(topicality)ではなく「主題的際立ち」(thematic prominence)という用語を用いる。Legendre, Raymond & Smolensky は既に(vi)a–f.に類似する制約を挙げており、(vi)cd.に当たるものでは

の左側にある範疇と組み合わせれば有標なものになるということを表す制約である。例えば, (vi)a.の「*主語/非情物」は「非情物主語は有標であるので, できる限り避けよ」という意味である。なお, (vi)ef.は受動文そのものが, 一般的には, 能動文に比べて有標なものであることを含意する。

- (vi) a. *主語/非情物 c. *主語/低主題性 e. *主語/非動作主
b. *非主語/有情物 d. *非主語/高主題性 f. *非主語/動作主

Aissen は, 受動文の分析には用いていないが, 言語構造と言語形式そのものが多ければ多いほど違反が重くなる有標性制約「*STRUC」(Prince & Smolensky 1993/2002: 25 注 13)にも触れている。この制約も日本語において受動文の方が一般的に有標であることを含意する。なぜなら, 対応する能動文にない形式として標識-(r)are-を含むからである。更に, 対応する能動文にない埋め込み構造まで想定する統語分析も多い(長谷川 1964, Kuroda 1965/1979a: 174-9, 以後多数)。

発話過程をモデル化する最適性理論的統語論では, 話し手が伝達しようとする意味を「入力」(input)とし, 複数の「候補」(candidates)から選択される「最適」(optimal)な形式を「出力」(output)とする。Aissen の分析では項の素性の指定されている意味的述語項構造が入力となり, その述語項構造を表す能動文と受動文が出力候補となる。本稿では更に, 話し手が伝達を意図する推意も入力の一部とする。なお, 標準最適性理論では一つの入力に対して無限の候補が生成されるとされるが, ここでは便宜のため入力の「忠実」(faithful)な表現となる能動文と受動文しか考慮しないことにする。

代表例として, 以下の「評価表」(evaluation tableau)に(4)a., (8)b., (10)b.の発話過程を示す。能動文も二受動文も言語構造と言語形式から成るものであるため, どちらも「*STRUC」に違反するが, 二受動文のみ標識-(r)are-を含むので, 評価表で便宜的に能動文には「*」を一つ, 二受動文には二つ与えた。(13)のように「宣言した(議長[有情物], 開会[非情物])」という素性付きの意味的述語項構造を入力とすれば, (vi)のいずれの制約にも違反せず「*STRUC」の違反も少ない能動文の(13)a.が制約順序のいかんにかかわらず最適な形式として出力される。(14)では, 感情動詞の使役形「驚かせる」の2項の意味役割, つまり「*主語/非動作主」と「*非主語/動作主」の違反については議論の余地があるが²², 表の通りこの2制約と

単に「際立ち」(prominence)という用語を用いるが, 「主語性と談話的際立ちの機能的相関関係の諸側面」(aspects of the functional correlation between subjecthood and discourse prominence)を形式的に捉えたものであると述べている。

²² これも議論の余地があることであるが, 「私は彼女の美しさに驚いた」という非使役文は2項の意味役割が(14)ab.のそれと異なるものと見なし, 考察の対象外とする。

「*STRUC」より「*主語/非情物」と「*非主語/有情物」の順位が高いとすれば、正しく(14)b.のニ受動文が出力される。点線は複数の制約が同順位になっていることを表す。(15)では、推意の「重要・優秀である(この論文)」が入力に含まれている結果として「この論文」の主題性が特に高く「チョムスキー」の主題性が比較的低く、「*主語/低主題性」と「*非主語/高主題性」の順位が最も高いとすれば、正しく属性叙述受動文の(15)b.が出力される²³。

	*主語/低主題性	*非主語/高主題性	*主語/非情物	*非主語/有情物	*主語/非動作主	*非主語/動作主	*STRUC
(13) 宣言した (議長 [有情物], 開会 [非情物])							
☞ a. 議長が開会を宣言した。							*
b. 開会が議長に宣言された。			*!	*!	*	*	**
(14) 驚かせた (彼女の美しさ [非情物], 私 [有情物])							
a. 彼女の美しさが私を驚かせた。			*!	*!	?	?	*
☞ b. 私は彼女の美しさに驚かされた。					?	?	**
(15) 引用した (チョムスキー [有情物, 低主題性], この論文 [非情物, 高主題性]) (数回) + {重要・優秀である (この論文)}							
a. チョムスキーがこの論文を数回引用した。	*!	*!					*
☞ b. この論文は, チョムスキーに数回引用された。			*	*	*	*	**

ニ受動文の(4)b.=(13)b.と同じく非情物主語と有情物非主語を持つニヨッテ受動文の(4)c.が不適合でないことは、「によって」の語彙的意味が真理条件に反映されており、意味的述語項構造が(4)ab.=(13)ab.のそれと異なることによると考える²⁴。つまり、(4)c.は(13)と異なる入力に対する出力形式であるとする。ニ受動文とそれに対応する能動文の意味的述語項構造が同一で、ニヨッテ受動文のみ意味的述語項構造を異にする立場は、ニヨッテ受動文こそ対応する能動文と同義で、ニ受動文のみ主語の指示

²³ (15)の入力に対する候補として、「この論文はチョムスキーが数回引用した」という目的語主題文も考えられる。このような文をどう扱うべきか、そして他の場合における「は」と「が」の選択や語順の決定をどのようにモデル化すべきかは今後の課題としたい。

²⁴ 詳細についてはトート 2012 を参照されたい。

対象が影響を受けることが真理条件に含まれるとする黒田(Kuroda 1979b = 1992: 183–221)の立場と正反対である。「によって」の語彙的意味がニヨッテ受動文の真理条件に反映されるとする本稿の立場の主な根拠は以下の(16), (17)のような文である。その不適格性は、井上(Inoue 1972: 198–203, 井上 1976b: 19–23)と寺村(1982: 220–3, 226–7)が示唆し、細川(1986: 1–2, 5–6)や神尾(Kamio 1989: 95–101), 福田(Fukuda 2011: 253–6), 石塚(Ishizuka 2010: 163–5 = 2012: 128–30)が指摘するように、ニヨッテ名詞句の指示対象が「によって」の語彙的意味により何らかの状態変化を引き起こすものでなければならぬにもかかわらず「嫌う」や「褒める」のような動詞が状態変化を含意しないということによると思われる。

(16) *この小説は若い人たちによって嫌われている。 (井上 1976b: 22)

(17) *私の作文が先生によって褒められた。 (同上)

3.4 語用論的分業の概念の適用

「*STRUC」に関しては必ず、そして通常は「*主語/非動作主」と「*非主語/動作主」に関しても、対応する能動文に比してニ受動文の方が違反が重くて有標である。非情物非動作主と有情物動作主の場合は「*主語/非情物」と「*非主語/有情物」に関してもそうである。従って、ニ受動文を用いる理由が別がない場合は、これらの制約に関して無標である能動文が用いられる。しかし、話し手が非動作主に関連する推意の伝達を意図する場合は、属性叙述受動文や潜在的受影者受動文が成立する。これらの受動文は以上の制約に関して有標な形式であるだけでなく、持つ推意により意味的にも有標であると考えたい。つまり、これも一種の語用論的分業として捉えるのである。

ただし、「*主語/低主題性」と「*非主語/高主題性」に関してはこれらの受動文こそ「無標」で、対応する能動文が「有標」であることに留意されたい。以下で「無標」または「有標」な形式と呼ぶのは、それ以外の 5 制約、つまり「*STRUC」「*主語/非動作主」「*非主語/動作主」「*主語/非情物」「*非主語/有情物」に関して無標または有標な形式のことである。また、これらの受動文の意味的有標性も、生産的使役の意味的有標性とは性質が異なる。前者が対応する能動文と共通する意味に推意が新たに加わること、つまり伝達情報の量によるのに対し、後者は使役の場面の非典型性、つまり伝達情報の内容によるのである。典型的な使役的場面と非典型的な使役的場面が相互排他的であるのに対し、これらの受動文の意味は対応する能動文の意味を包含するわけである。例えば、能動文の(15)a.を用いた場合は、「この論文は重要・優秀でない」という、(15)b.の推意の否定を含む解釈にはなるまい。

(13)のような非動作主に関連する推意を持たない能動文の発話過程及び解釈過程を2.3の(i)のように捉えてみると、以下の(vii)のようになる。(i)との最も大きな違いは推意が生じないこと、そしてそこにこそ能動文の意味の無標性が所在することにある。なお、伝達情報の過剰のみ制約するI原理は有標性制約とは性質がかなり異なるため、形式の有標性をも制約するR原理にのみ言及し、3.3で紹介した七つの有標性制約がR原理に相当するとする。

(vii) a. **無標な意味の場合の発話過程**

無標な意味（非動作主の相対的主題性を高める推意を含まない意味）を意図する話し手はR原理（有標性制約）に従って無標な形式（能動文）を用いる（(13)のように）。

b. **無標な形式の解釈過程**

無標な意味を意図して無標な形式を用いることはR原理に反しないので、聞き手は、話し手がR原理を守っていると想定していても、有標な意味（非動作主の相対的主題性を高める推意を含む意味）が意図されていると推論する根拠がなく、無標な意味が意図されているという解釈に至る。

属性叙述受動文や潜在的受影者受動文に対応する能動文にR推意が伴わないなら、これらの受動文が持つ推意を2.3の(ii)のようにQ推意として捉えることもできない。なぜなら、(ii)におけるQ推意の発生には、無標な形式が有標な形式の真理条件に含まれない意味、例えば使役的場面が典型的であるというR推意を持つことが必要だからである。一方、解釈過程(ii)b.を単純化した(iii)にはR推意への言及がないので、そのままこれらの受動文に適用できる。発話過程を3.3の(15)に合わせると、推意の発生の流れは以下の(viii)のようになる。

(viii) a. **有標な意味の場合の発話過程—R原理を用いる場合**

有標な意味を意図する話し手は、R原理（「*主語/低主題性」「*非主語/高主題性」を含む有標性制約）に従って、有標な形式（二受動文）を用いる（(15)のように）。

b. **有標な形式の解釈過程—R原理を用いる場合**

(vii)a.により、無標な意味を意図して有標な形式を用いることはR原理に反する。従って、話し手がR原理を守っていると想定する聞き手は、有標な意味が意図されていると推論する（R推意）。

Levinson (2000: 136–7)は M 原理の定義における「有標な意味」を非典型的な場面、つまり伝達情報の内容が有標である意味に限定しているため、厳密には(iv)も属性叙述受動文や潜在的受影者受動文に適用できないが、非動作主に関連する推意を含む意味も有標として認められるように M 原理の定義を広げれば、以下の(ix)のようにこれらの受動文にも適用できるようになる。しかし、3.3 で紹介した有標性制約を R 原理に相当するものと見なすことができるのに対して、「真理条件が同一である無標な形式と有標な形式があり、無標な形式が無標な意味を表すのに用いられる場合は、有標な形式は有標な意味を表すのに用いられる」という M 原理は形式の有標性そのものを制約するわけではないので、同様に扱うことができない。3.3 の(15)で主題性の高い非動作主名詞句が主語、主題性の低い動作主名詞句が非主語になることを保障するのも、以下の 3.5 で提示する双方向的解釈過程のモデルにおいて聞き手が非動作主に関連する推意を含む解釈に至ることを保障するのも「*主語/低主題性」と「*非主語/高主題性」の 2 制約であるため、本稿では(ix)ではなく(viii)の立場を採る。

(ix) a. **有標な意味の場合の発話過程—M 原理を用いる場合**

無標な形式は(vii)a.により無標な意味を表すのに用いられるため、話し手は、M 原理に従って、有標な形式を用いる。

b. **有標な形式の解釈過程—M 原理を用いる場合**

無標な形式は(vii)a.により無標な意味を表すのに用いられるため、話し手が M 原理を守っていると想定する聞き手は、有標な意味が意図されていると推論する (M 推意)。

3.5 属性叙述・潜在的受影者受動文の解釈過程の双方向的モデル

3.3 の(15)から分かるように、発話過程に双方向性を導入しなくても、非動作主に関連する推意を含む有標な意味の入力に対しては「*STRUC」「*主語/非動作主」「*非主語/動作主」「*主語/非情物」「*非主語/有情物」の 5 制約に関して有標である非情物主語の受動文が出力される。一方、(viii)b.から分かるように、解釈過程では双方向性が必要である。聞き手が話し手の観点をも考慮しなければ、話し手にとって非動作主の相対的主題性が高くなっていることが伝わらず、非動作主に関連する推意を含む解釈に至らない。

「最適性理論的意味論」(Optimality-Theoretic semantics)の一例として、以下の評価表に属性叙述受動文の(10)b.=(15)b.を入力とした双方向的解釈過程を示す。同じく非動

作主に関連する推意を含む潜在的受影者受動文もこのような解釈過程を想定する²⁵。出力候補としては、意味的述語項構造のみから成る(18)a.と、何らかの推意を含む(18)b-f.を考慮する。Zeevat (2000: 249–54)に倣って、発話過程において適用される制約が解釈過程においても適用されるのに加え、入力形式の真理条件に含まれない情報を含む「創造的」な解釈であればあるほど、つまり推論が必要な解釈であればあるほど違反が重くなる制約の「*INVENT」(Zeevatによる名付け)があるとする。更に、Zeevat (2009: 195–6)の考察を参考に、文脈や世界知識から見て「信じ難い」(implausible)解釈であればあるほど違反が重くなる制約の「*IMPL」(著者による名付け)があるとする²⁶。

²⁵ トート 2013 でも簡潔に属性叙述受動文や潜在的受影者受動文の双方向的解釈過程の最適性理論的モデルに触れているが、使役の語用論的分業との関連付けは行っていない。

²⁶ 「*INVENT」が「*IMPL」に包含されており、前者を別に設ける必要はないと論じることできる。すなわち、「推論が必要な解釈であればあるほど」とは「複雑な推論手順または大きな推論的飛躍を経てしか辿り着けない解釈であればあるほど」ということを意味するが、複雑な推論手順または大きな推論的飛躍が必要な解釈は必然的に「信じがたい」解釈であるため、「*INVENT」に違反する解釈は必然的に「*IMPL」にも違反すると言えるかもしれないのである。

	*INVENT	*IMPL	*主語/低主題性	*非主語/高主題性	*主語/非情物	*非主語/有情物	*主語/非動作主	*非主語/動作主	*STRUC
(18) この論文は, チョムスキーに数回引用された。									
a. 引用した (チョムスキー [有情物], この論文 [非情物]) (数回)	/	/	/	/	*	*	*	*	**
b. 引用した (チョムスキー [有情物, 高主題性], この論文 [非情物, 低主題性]) (数回) + {興味がある (チョムスキー, 日本語)}	*	/	*	*	*	*	*	*	**
c. 引用した (チョムスキー [有情物, 低主題性], この論文 [非情物, 高主題性]) (数回) + {重要・優秀である (この論文)}	*	/	/	/	*	*	*	*	**
d. 引用した (チョムスキー [有情物, 低主題性], この論文 [非情物, 高主題性]) (数回) + {MIT で書かれた (この論文)}	**!	/	/	/	*	*	*	*	**
e. 引用した (チョムスキー [有情物, 低主題性], この論文 [非情物, 高主題性]) (数回) + {New York Times に掲載された (この論文)}	**!* *!	/	/	/	*	*	*	*	**
f. 引用した (チョムスキー [有情物], この論文 [有情物]) (数回)		**!	/	/		*	*	*	**

「この論文」が擬人化されて有情物として解釈される極めて不自然な(18)f.を除き、入力是非情物主語と有情物非主語を持つ二受動文であるため、出力候補はいずれも同程度に「*STRUC」「*主語/非動作主」「*非主語/動作主」「*主語/非情物」「*非主語/有情物」の5制約に違反する。これら以外の4制約「*INVENT」「*IMPL」「*主語/低主題性」「*非主語/高主題性」に全く違反しないのは、「無標な意味」に当たる、推意を含まない(18)a.のみである。つまり、話し手が推意の伝達を意図していることが聞き手に伝わらない解釈である。3.4の(viii)b.で(vii)a.が参照されることによって(18)a.のような話し手の意図に反する無標な意味が排除されることを、ここでは2.4の(v)の双方向性の概念をもってモデル化する。無標な意味(18)a.を m_1 、無標な形式に当たる能動文を f_1 、そして有標な形式に当たる(18)の入力の二受動文を f_2 とすれば、3.3の(15)から「 $(f_1, m_1) < (f_2, m_1)$ 」が真であることが分かる。なぜなら、 $(18)a. = m_1$ を(15)

の入力にすると、(15)a. = f_1 が「*主語/低主題性」と「*非主語/高主題性」に違反しなくなり、最適な形式として出力されるからである。従って、(f_2, m_1)は超最適ではない。(18)a. = m_1 を意図する話し手は受動文ではなく能動文を用いるはずなのである。評価表で(18)a.に掛けられている打ち消し線は、無標な意味がこのように排除されることを表す。

(18)b.もこのように排除される。数回引用した論文が日本語をテーマにしたものであることが文脈から明らかであるとすれば「チョムスキーは日本語に興味があるに違いない」と推論することは想像に難くないが、「興味がある(チョムスキー, 日本語)」のような推意は通常、論文よりもチョムスキーの相対的主題性を高めるもののはずである。つまり、(18)b.を(15)の入力にしても能動文が出力されるのである。

(18)c–e.はいずれも「この論文」の相対的主題性を高める推意を含むため、「*主語/低主題性」と「*非主語/高主題性」には違反しないはずである。(18)c–e.のうち「*INVENT」と「*IMPL」の違反が最も少ないのは明らかに(18)c.である。(18)c.の推意は入力形式の真理条件とチョムスキーが著名な学者であるという背景知識から比較的推論しやすく、想像しやすい。著名な学者による引用の回数が論文の重要性や優秀性と相関するとすれば、副詞「数回」の意味にもよく符合する。(18)d.の推意の内容も十分想像できることではあるが、チョムスキー自身がMITにいてもそこに所属していない人の論文も数多く引用しているので、「この論文はMITで書かれたものであるに違いない」と推論する根拠は、それを示唆する特殊な文脈でない限り、薄い。便宜上、この違いを捉えるために「*INVENT」の違反の「*」を(18)c.には一つだけ、(18)d.には二つ与えた。(18)e.は、「この論文は*New York Times*に掲載されたに違いない」と推論する根拠が全くなく「*INVENT」の違反が更に重いだけでなく、研究論文は新聞に掲載されるものではないという常識に反するため、「*IMPL」にも違反するはずである。

(18)c.と違って(18)f.は「*主語/非情物」に違反しないのであるが、論文を擬人化したこの解釈は上で述べたように極めて不自然である。「*INVENT」と「*IMPL」を最上位にすれば、(18)f.やその他の「とんでもない解釈」を排除することができる。

(18)c.を m_2 、能動文を f_1 、そして受動文を f_2 とすれば、(18)c. = m_2 を入力とした発話過程である(15)で受動文 = f_2 が最適な形式として出力されることから「(f_1, m_2) < (f_2, m_2)」が偽で(f_2, m_2)が超最適であることが分かる。つまり、(18)c.は有標性制約の違反から見て(18)d–f.に勝るだけでなく、(18)ab.と違って双方向性によって排除されることもない。従って、(18)c.が最適な解釈として出力され、話し手が伝達を意図している推意が正しく聞き手に伝わるという結果になる。

4 おわりに

本稿では、語彙的使役と生産的使役の間に語用論的分業があるように、属性叙述受動文や潜在的受影者受動文と対応する能動文の間にも語用論的分業があるとした。そして、これらの分業がどこまで類似するかを吟味した。形式的にも意味的にも語彙的使役と能動文の両方を無標なものとしたものの、語彙的使役の方についてのみ R 推意が伴うと認めた。3.4 で述べたように、語彙的使役と生産的使役の間の意味的有標性の差異と、能動文と二受動文の間の意味的有標性の差異がそれぞれ性質の異なるものであるためである。一方、形式的にも意味的にも有標なものとした生産的使役と属性叙述受動文や潜在的受影者受動文はいずれも R 推意が伴うという立場を採った。その結果として、生産的使役とこれらの受動文のそれぞれの解釈過程を同様なものと見なすことができることを主張した。すなわち、2.3 の(iii)と 3.4 の(viii)b.である。

以上のことを踏まえ、二受動文の発話過程と双方向的解釈過程の最適性理論的モデルも提示した。3.3 の注 18 で述べたように、提示したモデルは日本語における態の選択をかなり単純化したものである。態の選択は、有情性や主題性以外にも、各参与者名詞句あるいはその指示対象の人称や指示性などの様々な要因に影響されるはずである。そして、順位の高い制約と低い制約の間に厳格な支配関係があるとされる標準最適性理論でこの様々な要因の微妙な釣り合いを正確に捉えることは恐らく不可能である。最適性理論の前身で、厳格支配の代わりに制約それぞれに実数の加重値が付与される調和文法の方が適していると思われるが、更なる検討は著者が現在準備している別稿に譲ることとしたい。

参考文献

- 天野みどり (2001) 「無生物主語の二受動文 一意味的關係の想定が必要な文一」『国語学』 52(2) : 1-15.
- 天野みどり (2002) 『文の理解と意味の創造』 東京 : 笠間書院.
- 井島正博 (1988) 「受身文の多層的分析」『防衛大学校紀要 人文科学分冊』 57 : 71-103.
- 井上和子 (1976a) 『変形文法と日本語 上・統語構造を中心に』 東京 : 大修館書店.
- 井上和子 (1976b) 『変形文法と日本語 下・意味解釈を中心に』 東京 : 大修館書店.
- 金水敏 (1991) 「受動文の歴史についての一考察」『国語学』 164 : 1-14.
- 金水敏 (1992) 「場面と視点 一受身文を中心に一」『日本語学』 11(8) : 12-9.
- 工藤真由美 (1990) 「現代日本語の受動文」言語学研究会 (編) 『ことばの科学 4』 47-102. 東京 : むぎ書房.
- 久野暲 (1978) 『談話の文法』 東京 : 大修館書店.

- 久野暲 (1986) 「受身文の意味 —黒田説の再批判—」『日本語学』5(2) : 70–87.
- 小泉保・船城道雄・本田晶治・仁田義雄・塚本秀樹 (編) (1989) 『日本語基本動詞用法辞典』東京 : 大修館書店.
- 高見健一 (1995) 『機能的構文論による日英語比較』東京 : くろしお出版.
- 武田素子 (2014) 「「潜在的受影者」説の精密化」『日本語文法』14(1) : 105–13.
- 寺村秀夫 (1982) 『日本語のシンタクスと意味 第 I 巻』東京 : くろしお出版.
- トート ルディ (2011) 「非情物主語のニ受動文 関連性に基づく分析へ」『京都大学言語学研究』30 : 107–45
- トート ルディ (2012) 「ニヨッテ受動文についての一考察 —ニ・ニヨッテ受動文の統一的な分析に向けて—」『京都大学言語学研究』31 : 181–209
- トート ルディ (2013) 「日本語の態体系の最適性理論的分析の可能性について」『京都大学言語学研究』32 : 103–28
- 長谷川欣佑 (1964) 「日本語文法試論」『言語文化』1 : 3–46.
- 細川由起子 (1986) 「日本語の受身文における動作主のマーカ―について」『国語学』144 : 113–24.
- 堀川智也・森篤嗣・栗原由加・和栗夏海 (2003) 「事態把握の相違に基づく日本語受身文の分類」『日本語・日本文化研究』13 : 29–38.
- 益岡隆志 (1982) 「日本語受動文の意味分析」『言語研究』82 : 48–64.
- 益岡隆志 (1987) 『命題の文法 —日本語文法序説—』東京 : くろしお出版.
- 益岡隆志 (1991a) 『モダリティの文法』東京 : くろしお出版.
- 益岡隆志 (1991b) 「受動表現と主観性」仁田義雄 (編) 『日本語のヴォイスと他動性』105–21. 東京 : くろしお出版.
- 益岡隆志 (2000) 『日本語文法の諸相』東京 : くろしお出版.
- 松下大三郎 (1930) 『標準日本口語法』東京 : 中文館書店.
- 三矢重松 (1908) 『高等日本文法』東京 : 明治書院.
- 山田孝雄 (1908) 『日本文法論』東京 : 宝文館.
- 和栗夏海 (2005) 「属性叙述受動文の本質」『日本語文法』5(2) : 161–79.
- Aissen, Judith (1999) Markedness and Subject Choice in Optimality Theory. *Natural Language and Linguistic Theory* 17(4): 673–711.
- Aissen, Judith (2001) Markedness and Subject Choice in Optimality Theory. In Legendre, Géraldine, Jane Grimshaw, and Sten Vikner (eds.), *Optimality-Theoretic Syntax*. Cambridge, MA: MIT Press. 61–96.

- Atlas, Jay David and Stephen C. Levinson (1981) *It-Clefts, Informativeness, and Logical Form: Radical Pragmatics (Revised Standard Version)*. In Peter Cole (ed.), *Radical Pragmatics*. New York, NY: Academic Press. 1–61.
- Blutner, Reinhard (1998) Lexical Pragmatics. *Journal of Semantics* 15(2): 115–62.
- Blutner, Reinhard (2000) Some Aspects of Optimality in Natural Language Interpretation. *Journal of Semantics* 17(3): 189–216.
- Blutner, Reinhard and Henk Zeevat (2004) Editors' Introduction: Pragmatics in Optimality Theory. In Reinhard Blutner and Henk Zeevat (eds.), *Optimality Theory and Pragmatics*. Basingstoke: Palgrave Macmillan. 1–24.
- Fukuda, Shinichiro (2011) Two *By*-Phrases in Japanese Passive. In William McClure and Marcel den Dikken (eds.), *Japanese/Korean Linguistics 18*. Stanford, CA: Center for the Study of Language and Information. 253–65.
- Givón, Talmy (1991) Markedness in Grammar: Distributional, Communicative and Cognitive Correlates of Syntactic Structure. *Studies in Language* 15(2): 335–70.
- Grice, H. Paul (1975) Logic and Conversation. In Peter Cole and Jerry L. Morgan (eds.), *Syntax and Semantics 3: Speech Acts*. New York, NY: Academic Press. 41–58.
- Grice, H. Paul (1989) *Studies in the Way of Words*. Cambridge, MA: Harvard University Press.
- Grice, H. Paul (1991) Logic and Conversation. In Steven Davis (ed.), *Pragmatics: A Reader*. Oxford: Oxford University Press. 305–15.
- Horn, Laurence R. (1984) Toward a New Taxonomy for Pragmatic Inference: Q-Based and R-Based Implicature. In Deborah Schiffrin (ed.), *Meaning, Form, and Use in Context: Linguistic Applications*. Washington, DC: Georgetown University Press. 11–42.
- Inoue, Kazuko (1972) *Agent and Source* in Japanese. *Papers in Japanese Linguistics* 1(2): 195–217.
- Ishizuka, Tomoko (2010) Toward a Unified Analysis of Passives in Japanese: A Cartographic Minimalist Approach. Doctoral dissertation, University of California Los Angeles.
- Ishizuka, Tomoko (2012) *The Passive in Japanese: A Cartographic Minimalist Approach*. Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.
- Jäger, Gerhard (2002) Some Notes on the Formal Properties of Bidirectional Optimality Theory. *Journal of Logic, Language and Information* 11: 427–51.
- Jäger, Gerhard and Reinhard Blutner (2000) Against Lexical Decomposition in Syntax. In Adam Zachary Wyner (ed.), *IATL 7: The Proceedings of the Fifteenth Annual Conference*. Haifa: Israel Association for Theoretical Linguistics. 113–37.

- Kamio, Akio (1989) A Semantic and Pragmatic Analysis of the Japanese Passive. In Takeo Saito (ed.), *Judōkōbun no Kenkyū* [受動構文の研究]. Tsukuba: Department of Modern Languages and Cultures, University of Tsukuba. 91–112.
- Klaiman, Mimi H. (1982) Affectiveness and the Voice System of Japanese: Satisfaction Guaranteed or Your Money Back. In Monica Macaulay, Orin D. Gensler, Claudia Brugman, Inese Čivkulis, Amy Dahlstrom, Katherine Krile, and Rob Sturm (eds.), *Proceedings of the Eighth Annual Meeting of the Berkeley Linguistics Society*. Berkeley, CA: Berkeley Linguistics Society. 398–413.
- Kuno, Susumu (1990) Passivization and Thematization. In Osamu Kamada and Wesley M. Jacobsen (eds.), *On Japanese and How to Teach It: In Honor of Seiichi Makino*. Tokyo: Japan Times. 43–66.
- Kuroda, Sige-Yuki (1965/1979a) Generative Grammatical Studies in the Japanese Language. Doctoral dissertation, Massachusetts Institute of Technology. Published in 1979, New York, NY: Garland Publishing.
- Kuroda, Sige-Yuki (1979b) On Japanese Passives. In George Bedell, Eichi Kobayashi, and Masatake Muraki (eds.), *Explorations in Linguistics: Papers in Honor of Kazuko Inoue*. Tokyo: Kenkyusha. 305–47.
- Kuroda, Sige-Yuki (1992) *Japanese Syntax and Semantics: Collected Papers*. Dordrecht: Kluwer Academic Publishers.
- Lakoff, George and Mark Johnson (1980a) Conceptual Metaphor in Everyday Language. *Journal of Philosophy* 77(8): 453–86.
- Lakoff, George and Mark Johnson (1980b) *Metaphors We Live By*. Chicago, IL: University of Chicago Press.
- Lange, Rudolf (1890) *Lehrbuch der japanischen Umgangssprache: Formenlehre und die wichtigsten Regeln der Syntax*. Stuttgart: W. Spemann.
- Legendre, Géraldine, Yoshiro Miyata, and Paul Smolensky (1990a) Harmonic Grammar—A Formal Multi-Level Connectionist Theory of Linguistic Well-Formedness: Theoretical Foundations. In The Cognitive Science Society (eds.), *The Twelfth Annual Conference of the Cognitive Science Society*. Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum Associates. 388–95.
- Legendre, Géraldine, Yoshiro Miyata, and Paul Smolensky (1990b) Harmonic Grammar—A Formal Multi-Level Connectionist Theory of Linguistic Well-Formedness: An Application. In The Cognitive Science Society (eds.), *The Twelfth Annual Conference of the Cognitive Science Society*. Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum Associates. 884–91.

- Legendre, Géraldine, Yoshiro Miyata, and Paul Smolensky (1992) Can Connectionism Contribute to Syntax? Harmonic Grammar, with an Application. In Michael Ziolkowski, Manuela Noske, and Karen Deaton (eds.), *Papers from the 26th Regional Meeting of the Chicago Linguistic Society, Volume 1: The Main Session*. Chicago, IL: Chicago Linguistic Society. 237–52.
- Legendre, Géraldine, William Raymond, and Paul Smolensky (1993) An Optimality-Theoretic Typology of Case and Grammatical Voice Systems. In Joshua S. Guenter, Barbara A. Kaiser, and Cheryl C. Zoll (eds.), *Proceedings of the Nineteenth Annual Meeting of the Berkeley Linguistics Society: General Session and Parasession on Semantic Typology and Semantic Universals*. Berkeley, CA: Berkeley Linguistics Society. 464–78.
- Legendre, Géraldine, William Raymond, and Paul Smolensky (2006) Optimality in Syntax I: Case and Grammatical Voice Typology. In Paul Smolensky and Géraldine Legendre (eds.), *The Harmonic Mind: From Neural Computation to Optimality-Theoretic Grammar—Volume 2: Linguistic and Philosophical Implications*. Cambridge, MA: MIT Press. 161–81.
- Levinson, Stephen C. (1987) Pragmatics and the Grammar of Anaphora: A Partial Pragmatic Reduction of Binding and Control Phenomena. *Journal of Linguistics* 23: 379–434.
- Levinson, Stephen C. (2000) *Presumptive Meanings: The Theory of Generalized Conversational Implicature*. Cambridge, MA: MIT Press.
- McCawley, James D. (1972) Kac and Shibatani on the Grammar of Killing. In John P. Kimball (ed.), *Syntax and Semantics 1*. New York, NY: Seminar Press. 139–49.
- McCawley, James D. (1973) Syntactic and Logical Arguments for Semantic Structures. In Osamu Fujimura (ed.), *Three Dimensions of Linguistic Theory*. Tokyo: TEC. 259–376.
- McCawley, James D. (1978) Conversational Implicature and the Lexicon. In Peter Cole (ed.), *Syntax and Semantics 9: Pragmatics*. New York, NY: Academic Press. 245–59.
- Prince, Alan and Paul Smolensky (1993/2002) Optimality Theory: Constraint Interaction in Generative Grammar. Technical report, University of Colorado Boulder. Final revision in 2002.
- Shibatani, Masayoshi. (1973) Semantics of Japanese Causativization. *Foundations of Language* 9(3): 327–73.
- Shibatani, Masayoshi (1976a) Causativization. In Masayoshi Shibatani (ed.), *Syntax and Semantics 5: Japanese Generative Grammar*. New York, NY: Academic Press. 239–94.

- Shibatani, Masayoshi (1976b) The Grammar of Causative Constructions: A Conspectus. In Masayoshi Shibatani (ed.), *Syntax and Semantics 6: The Grammar of Causative Constructions*. New York, NY: Academic Press. 1–40.
- Shibatani, Masayoshi (2006) On the Conceptual Framework for Voice Phenomena. *Linguistics* 44(2): 217–69.
- Zeevat, Henk (2000) The Asymmetry of Optimality Theoretic Syntax and Semantics. *Journal of Semantics* 17(3): 243–62.
- Zeevat, Henk (2009) Optimal Interpretation as an Alternative to Gricean Pragmatics. *Oslo Studies in Language* 1(1): 191–216.

Two Divisions of Pragmatic Labor: Lexical vs. Productive Causatives and Actives vs. Passives

Rudy TOET

Abstract

In the literature on causatives, including but not limited to those in Japanese, it has been argued that there is a ‘division of pragmatic labor’ between productive and lexical causatives, such that the former are marked relative to the latter not only in form but also in meaning. This has additionally been captured in a bidirectional model, such that the production process makes reference to the interpretation process and vice versa. Japanese ‘subject-characterizing passives’, which imply that the subject referent has a certain property, and ‘implied affectee passives’, which imply that an unmentioned entity connected to the subject referent is affected by the eventuality expressed by the sentence, can likewise be seen as marked relative to the corresponding actives, not only formally but also semantically, due to the fact that they carry implicit meaning that is absent from these actives. In this paper I examine the degree to which these two phenomena are similar, partly applying the concept of a division of pragmatic labor to subject-characterizing passives and implied affectee passives. In particular, I argue that the interpretation process of subject-characterizing passives and implied affectee passives is equivalent to that of productive causatives, both of them featuring implicature derivation through bidirectionality. I also discuss an Optimality-Theoretic model of the production and bidirectional interpretation processes of subject-characterizing passives, implied affectee passives, and other passives in Japanese.

Keywords: Causatives, passives, markedness, implicature, Bidirectional Optimality Theory

受領日 2020年10月5日
受理日 2020年12月11日